

最後のお米

都城市立山之口中学校 2年 別府 壺愛尊

一年前に祖父が亡くなり、祖父母と過ごした田んぼも、今は草だらけになってしまいました。

僕の家では、米を作っていました。祖父母が中心となり、家族みんなが朝早くから夕方まで、作業をしたことを思い出します。田んぼのことで僕が覚えているのは、小学校低学年の頃からです。小さかったので何も手伝うことはできず、祖父の動かしている機械を見ていたり、泥水で遊んでいたりにしていました。一人でカエルやカニを捕まえたり、野生のイタチやアナグマ、タヌキ、リスなどを見て驚いたりしたことを覚えています。

やがて、末っ子の僕以外はみんな、小学校や中学校に行ってしまう、僕と祖父母の三人で田んぼの世話をするようになりました。

猛暑の夏は、田んぼの水がほとんどなくなり、乾いてしまいます。僕が草の影を見つけて、休んでいる時も祖父母は手を休めず田んぼで作業を続けます。こんなに暑いのになぜ作業を続けていられるのだろうと不思議でした。僕も少しだけ作業を手伝いましたが、すぐにしぼれるくらい汗でぬれてしまいました。そんな暑い作業の中で僕には楽しみがありました。田んぼの作業が終わった後に、みんなで食べる冷やし中華です。祖父母と話しながら田んぼのそばの木陰で食べる冷やし中華は、冷たくていつもの数倍おいしく感じました。

夏の後半になると、だいぶ稲も育ってきます。自分で植えてお世話した稲が、これほど大きくなると、毎年のように嬉しくなります。収穫の日が待ち遠しくてしかたがなくなりました。まだ収穫までは数ヶ月かかり、その間も今までやってきたことを繰り返さなければいけません。

この頃から少し時間が早く過ぎていくような気がします。

そして、ついに米を収穫します。祖父は、いつもよりも、もっと大きな機械を使って収穫をします。毎年僕はこの大きなコンバインを見るのが楽しみでしかたがありませんでした。僕たちは、機械が束ねた稲を干す作業をします。干すための竹を組むのも大変でした。干す竹に僕たちは、数十束ずつ稲を干します。束ねられた稲は重く、竹にかけるのが大変でした。それからは、稲が乾くのを待ちます。

そして、いよいよ脱穀です。米とわらの分別をします。米を一ヶ所に集めると、米は五俵くらいになります。そして、実際に五俵の米を前にすると、僕は今までの苦労以上に達成感を感じます。

僕は、こんな時間がずっと続くものだとばかり思っていました。でも、数年前に祖母が病で倒れ農作業ができないくらいに弱ってしまいました。それから祖父と僕で、今までより小さな田んぼで作業を続けましたが、その祖父も昨年亡くなってしまいました。祖父といっしょに作った米がもうなくなります。小さい頃からあたり前のように食べていた祖父の、僕たち家族の米がなくなります。あたりまえだと思っていたものが、とても大切なものだったのだと気づきました。

しかし家族のために米を作った時間、祖父母との時間は、僕の中ではなくなりはしません。厳しいあの暑さの中でも家族のために汗を流す祖父の強さ。その横でまじめに手を動かす祖母の優しさ。そんな二人の思いは、僕の中でなくなりはない、大切な宝物です。